

一般教養英語としてのリーディング —高校英語から EAP へ—

志村美加

はじめに

大学1・2年生を対象とする一般教養英語は、リーディングとコミュニケーションの2クラスで構成されることが多い。多くの大学で、学生は週1回ずつ、合計2クラスの英語の授業を通して英語力を伸ばしていくことが求められる。この2つのクラスを比較した場合、リーディングの方が苦手、あるいは退屈と感じる学生の割合は高い。しかし、大学という学びの場において、専門分野の文献を読みこなすためには、高校までのリーディング力で終結するのではなく、もう一歩上のリーディング力が求められる。大学におけるリーディング・クラスは、そのための基礎を提供する重要な役割を担っている。こうした目的を効率よく達成するためには、どのように学生にリーディングの重要性を認識させ、関心をひきつけるのかということが大きな課題となる。

これまで、リーディングの分野では教授法や、テキストの語彙、アクティビティなどを中心とした研究が行われてきた。しかし、授業を展開する上で重要な要素であるトピックに関してはあまり研究が行われてきていない。そこで、本研究では、リーディング教材としてどのようなトピックが学生に適切であるのかという点を検討していきたい。高校時代のリーディング力を大学で更に伸ばすというという観点から、まず、学生が高校3年間に使用した英語教科書の分析から行いたい。そして、学生へのアンケートも加えて分析することで、一般教養英語のリーディングの目的を検討し、教材として適切なトピック選択の足がかりとしたい。

1. リーディングと一般教養英語

これまでのリーディング研究の多くは、テキストの語彙難易度分析（山添 2006、長谷川他 2006 等）や設問分析（小野・武久 2010、深澤 2010、2008、八木 2001 等）、指導法（Singhal 2001, Jacob et. al 1996, Dreyer & Nel 2003 等）を中心とし、どのようにテキストの難易度が決まるのか、どのような設問が理解を深めるのかなどといった点に焦点が当てられてきた。これは、大学のリーディング・クラスにおいても重要な論点である。これに対し、生徒が高校3年間でどのようなトピックに触れ、英語を学んでいるのか、またどのようなトピックが好まれるのかといった点に関して分析を行っている先行研究は極端に少ない。石川・白井他（1987）では、高校生が面白いと評価したものは、オチがある話やわくわくしながら読むことができる緊張感のある話、生や死などを扱った話であるという結果が示されている。その一方で、非日常的なもの、メッセージ性がないものは面白いという評価を受けることがないということも指摘されている。トピックを扱った先行研究はこのように数少ないが、授業を行ううえで教材の選択は最も重要な点の一つであり、一般教養英語においてもその重要性は変わらない。

どのようなトピックが大学生に適切であるのかを検討するに当たり、まず一般教養英語が目指すものが何であるのかということを検討する必要がある。高校までとは異なり、文部科学省から明確な達成指標が示されない一般教養英語のリーディングは、目的が曖昧になりがちである。担当教員がリーディングを教える場合、教材として教員自身の専門分野に近いものが選択される傾向が強く、一般教養英語を担当する教員の多くが専門とする英文学、英語学、英語教育（大学英語教育学会実態調査委員会 2003）から題材が選ばれることが多い。そのため、学生の専攻と一致しないことも多いのが現状である。一般教養英語として様々な専攻の学生のニーズに応えようとする場合、担当教員の専攻分野以外を取り上げる必要も生じるが、専攻から大きくかけ離れたトピックを取り上げることは実際には大変困難であり、問題が生じることも多い（田地野 2005）。

そこで重要なガイドラインとなるものが「学術目的の英語 (English for Academic Purposes, EAP)」という考え方である。EAP は、言語技能面としてはあらゆる専門分野に共通する学術的言語技能を習得することを目的としている。具体的には、スタディ・スキルの習得、つまり、講義の理解やノートの作成、授業における質疑応答、文献の読解と解釈、データの分析と解釈、論文の執筆、口頭発表などの技術の習得を指す (田地野 2005)。田地野・水光 (2005) は、大学における一般教養英語は学術研究に役立つ英語教育を目指すべきであると主張するが、EAP は学術研究の基礎となる英語学習であるといえる。

EAP の考え方をリーディングに適用したものは、アカデミック・リーディング (Academic Reading) と呼ばれ、大学での講義や研究で必要となる読解技能の育成を目指す (Jordan 1997)。その目的は、1) 事実やデータなどの情報を得る、2) 理論や概念を理解する、3) 著者の見解や意図を理解する、4) 読者自身の主張の根拠とする、などである。これらの目的を達成するには、1) 読む速度を上げる、2) 特定の情報を探す、3) 概要を理解する、4) データを理解し分析する、5) メモを作成する、といったスタディ・スキルが必要とされる。この点を考慮してうえで、教員は、1) 学生の専門分野に関連した内容を扱う、2) 専門ではなくとも、学生にとって面白い、あるいは教養を高めるために役立つと思われる内容を扱う、3) 一般的に役立つ実用的技能を育成できる内容を扱う、といった点に注意を払うことが求められる (田地野 2005)。

EAP を基盤とした英語プログラムが組まれている大学は数が少なく、国際基督教大学 (富山 2006 参照)、京都大学 (田地野 2009 参照)、獨協大学 (飯島・菊池他 2011、飯島・志村他 2011 参照)、筑波大学 (筑波大学ホームページ参照) などが例として挙げられる。これらの大学では共通プログラムとして EAP の概念が取り入れられているが、教員が個人として EAP の概念を基に授業を構成することも可能である。

また、一般教養英語の目的を検討する際には、高校英語からの移行も考慮する必要がある。小学校での英語教育が始まり、小学校から大学までの英語教育の連携の必要性が指摘されることも多くなった (岡田 2011)。一般教養英語を「中高等英語教育の終着点ではなく、学部専門教育への出発点」(田地野

2005) とするためには、高校英語との連続性を考慮したうえで、アカデミック・リーディングを更に強化するための教科書選択、授業構成に力を入れることが求められる。

2. 被験者とデータ

本研究では、学生が高校3年間に使用した英語教科書と学生へのアンケートをデータとして分析を行った。

英語教科書としては、大学進学を意識した高校が選択することが多いといわれる10種類の教科書3年分、計30冊の分析を行った。学生が使用した教科書を特定し、分析を行うことも可能であるが、一部の学生が高校時代に使用した教科書のタイトルを記憶していないことが明らかになったため、代表的な教科書を選択する形式とした。10種類の教科書には、2005年から2007年にかけて検定が行われたCrown(三省堂)、Element(啓林館)、Genius(大修館)、Magic Hat(教育出版)、Mainstream(増進堂)、Polestar(数研出版)、Prominence(東京書籍)、Pro-Vision(桐原書店)、Unicorn(文英堂)、Voyager(第一学習社)が含まれる。

これに加えて、リーディング・クラスを履修している大学1年生101名を対象に行ったアンケートの分析を行った。101名の学生は英語・英文学以外を専攻し、一般教養英語としてリーディング・クラスを履修している学生である。

3. 手順

高校教科書を分析するに当たっては、それぞれの教科書でどのようなトピックが取りあげられているのか、そして本文中にどの国、あるいはどの国出身の人物が取り上げられているかという分析を行った。

アンケートは、1学期の終了時に行った。大学入学後、リーディング・クラスを初めて履修した学期であるため、高校時代との相違が最も強く感じられるとの判断からである。学生が何を一番強く感じているかを明らかにするため、自由記述形式の質問とした。アンケートで用いた質問は、1) 1学期間授業を受けてどうでしたか、2) 教科書についてどう思いますか、という計2問である。

1 学期の授業としては、アカデミック・リーディングの目的の一部である「事実とデータなどの情報を得る」、そして「著者の見解や意図を理解する」ことを目標に、「特定の情報を探す」こと、そして「概要を理解する」ことに重点を置いた授業を行った。したがって、中学・高校の授業で行われることが多い全文和訳の授業形態(岡 2011)を避けた。全文和訳を行わないという慣れない形態から生じる緊張をほぐすため、小グループで文章について話し合う時間を多くとった。一部の学生からは「苦情」がきたが、なぜ全文和訳を行わないのかという説明を繰り返し行い、方針の変更は行わなかった。そして、本文中の重要な点を限定して取り上げ、中学・高校の英語の授業形式とのギャップを埋める形をとった。

教科書としては、学生の平均英語力よりもレベルが上である「Tapestry 4」(Oxford & Sokolik 2010)を使用した。この教科書はアカデミック・リーディングの力を伸ばしながら、スタディ・スキルを習得することを目的としている。1 学期間で取り上げたトピックは、香港返還、アメリカの移民問題、第二次世界大戦中の日系人収容所、プラグマティックな言語分析の 4 つである。それぞれ、スピーチ原稿、論説文、短編小説等となっている。

4. データ分析と考察

4.1. 教科書分析

4.1.1. 取りあげられているトピック

高校英語教科書に関しては、取りあげられているトピック、本文中に取り上げられている国を学年ごとに分析した。

トピックを分類する際には、「言語、異文化、環境、社会問題・現象、戦争・平和、芸術、スポーツ、心理、科学、教育、医療、歴史、人生、物語」という計 14 項目を使用した。本文に当てはまる項目が複数あるものに関しては、複数の項目にまたがった形で分類を行った。分類の結果と、各項目の全体における割合は下記の表 1 のようになる。また、項目ごとの主な例は表 2 のとおりとなる。例としては、複数の教科書に取り上げられたトピックをあげた。

表1：高校教科書のトピックとその割合

トピック	学年			合計	%
	1年	2年	3年		
言語	5	7	7	19	4
異文化	13	7	2	22	4.9
環境	7	12	9	28	6.3
社会	12	18	18	48	10.8
戦争	9	4	4	17	3.8
芸術	15	10	9	34	7.6
スポーツ	4	2	2	8	1.8
心理	5	9	4	18	4.0
科学	12	19	29	60	13.5
教育	4	1	2	7	1.6
医療	3	3	4	10	2.2
歴史	6	7	10	23	5.2
人生	22	34	33	89	20.0
物語	18	19	26	63	14.1

表 2：各項目と主なトピック例

トピック	主な例
言語	スベリング、イディオム、消えていく言語、動物とのコミュニケーション
異文化	ホームステイや移住体験、日英語の発想の違い
環境	アマゾン熱帯雨林、地球温暖化、アフリカ・グリーンベルト
社会	情報社会、人種差別、難民問題、ボランティア活動
戦争	第二次世界大戦（ユダヤ人）、サラエボ、アフガニスタン、広島
芸術	写真：星野道夫、漫画：スヌーピー、西洋美術：ルネッサンス、ゴッホ
スポーツ	野球、特徴のあるスポーツ（ロッククライミング、カバディ、カボエイラ等）
心理	動物による癒し、錯視、夢、人間関係
科学	火星、脳、生物の生態、GM Food、進化論、IT、ロボット、物理学
教育	学校（小学校、大学）
医療	障害、難病、健康、国境なき医師団
歴史	国や都市（ハワイ、ヨーロッパ等）、戦争（日本、リトアニア、ドイツ等）
人生	杉原千畝、セヴァン・カリス＝スズキ、緒方貞子、中村哲、ワングリ・マータイ、モハメド・ユヌス、レイチェル・カーソン、リチャード・ファインマン
物語	沈黙の春、短編（アメリカ、イギリス、日本）、映画（アメリカ、イギリス）

表 1 から、主に教科書で取り上げられているトピックとしては、「人生」(20%)、「物語」(14.1%)、「社会問題・現象」(10.8%)、「科学」(13.5%)が多いことが分かる。

「人生」の割合が高い理由としては、各教科書において必ず特定の人物の人生が描かれている課があることによる。どの人物が取り上げられるかは、教科書が執筆された時点での社会的要素が影響していることが多い。今回分析に用いた教科書は現在高校で使用されているものであるが、2005 年から 2008 年に執筆されたものが中心となっている。そのため、その時点までにノーベル賞を受賞した人物、公開された映画の中で話題となった人物、特定の社会問題に関連して話題となった人物などが取り上げられることが多くなっている。したがっ

て、学生が高校教科書で学んできた主な人物としては、大学入学時から5～6年さかのぼる範囲で話題に上ることが多かった人物であると想定することができる。

今回の教科書の場合、ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏、ノーベル経済学賞を受賞したモハメド・ユヌス氏が登場することが多く、また国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子氏、アフガニスタン問題が話題となる中、国境なき医師団のメンバーとして活躍した中村哲医師、映画や回顧録で話題となった杉原千畝氏、レイチェル・カーソン氏などが取り上げられている。1992年にリオデジャネイロで行われた地球環境サミットで「伝統のスピーチ」をした12歳のセヴァン・カリス＝ズズキ氏が成人し、環境活動家として活躍していることも話題になったため、複数の教科書で取り上げられている。

また、「物語」は、平均2編の短編が各教科書に組み込まれているために高い割合となっている。主に、Readingとして他の課とは独立した構成になっているが、この「物語」の内容は、上記の「人生」のように必ずしも執筆時の社会情勢を反映したものとはなっていない。一部の教科書は、話題となった映画のストーリーや、名作といわれるオー・ヘンリや星新一の短編を取り上げているが、あまり話題となったことがない物語が含まれていることも多い。

「科学」が多い理由としては、生物学、物理学、工学、物理学等の分野を1つのカテゴリーとしていることにも要因がある。個々の分野は低い数値であるが、合計した場合には大きな数値となっている。ここから分かることは、高校英語教科書では理系の話題が取り上げられることも多いということである。取り上げられる話題としては、教科書執筆時に話題となった人物が専門とする分野、今回の場合は、かつてノーベル物理学賞を受賞し、自伝やエッセイ執筆で話題となったりチャード・ファインマン氏が複数の教科書で取り上げられている。その他には、火星探索や脳の仕組みなど、社会で話題になり、かつ限られた語彙を使って説明することが可能なトピックが主に採用されているようである。ただし、必ずしも社会的に大きな話題とならなかった「教養を高めるために役立つ内容」も含まれている。

学年が上がるにつれて増える傾向にあるトピックとしては、「科学」、そして、

「人生」、「社会問題・現象」、「物語」が挙げられる。高校1年次には、「異文化コミュニケーション」、「芸術」、「スポーツ」などの親しみやすいトピックが多く取り上げられているが、学年が上がるにつれて、かたい話題、つまりアカデミックな話題が取り上げられる割合が増えるのである。これは、学年が上がるにつれ、科学や社会問題など、少しずつアカデミックな要素が加えられたものを読み、「教養が高まる内容」になっていることを意味する。

4.1.2. 本文中で取り上げられている国

トピックと関連して、各課の本文で出てくる国の多様性をまとめたものが下記の表3である。

表3：高校教科書の本文にみられる国とその割合

学年	国・地域											
	日本	アメリカ	イギリス	カナダ	オーストラリア	ニュージーランド	ヨーロッパ	アフリカ	中南米	アジア	中近東	他
1年	53	54	19	11	4	0	28	9	11	26	14	0
2年	35	70	26	4	6	1	47	9	6	28	6	0
3年	37	80	38	3	6	6	54	15	17	50	11	2
合計	125	204	83	18	16	7	129	33	34	104	31	2
%	15.9	26.0	10.6	2.3	2.0	0.9	16.4	4.2	4.3	13.2	3.9	0.3

本文中で取り上げられる国としては、英語圏である「アメリカ」、「イギリス」の割合が合わせて35%強となっている。英語の教科書としては、英語圏の話題が多くなることはやむを得ないことであろう。また、「日本」や、「ドイツ」、「フランス」、「ロシア」などを中心とした「ヨーロッパ」、中国、韓国、フィリピンなどを中心とした「アジア」の割合もそれぞれ15%近くになっている。それに対し、「アフリカ」や「中南米」、「中近東」といった地域に関しては、割合が低く、5%を割っている。生徒にとって身近な話題、あるいは分かりやすい話題を取り上げた課を構成していく中で、このような偏りが生じているのではないかと思われる。

もっとも、学年が上がるにつれて取り上げられる国・地域の数が増加し、多

岐に渡っていることが分かる。「日本」の割合が1年次に多く、2年次・3年次には減少することからも、身近な日本を例に学び始め、学年が上がるにつれてより多くの国の話題に触れる構成となっていることが分かる。したがって、本文で取りあげられている国を分析した場合にも、トピックの分析と同様、学年があがるにつれて様々な国のことを学ぶという「教養を高める内容」となっていることが明らかになったと言える。

4.1.3. トピックと国の総合的分析

高校3年間で取り上げられているトピックと本文中に出てくる国を総合的に分析すると、高校3年次までにアカデミックなトピックが増え、世界の様々な国に眼を向けた課が増えていることがわかる。

また3年次には、1つの課の英文の長さも約1000語と長くなっており、トピック・センテンスを始めとするパラグラフ構成を理解することが目標となっている。パラグラフ構成は、理論や著者の見解がどのように展開されているかを理解する重要な糸口となる。つまり、3年次の教科書は、アカデミック・リーディングへの足がかりとも言うべき教科書構成となっている。したがって、大学における一般教養英語の目的をEAPとする場合、高校英語からの移行が比較的容易であることがわかる。高校英語教科書では、学年が上がるにつれアカデミックなトピックを扱う課が増え、様々な国に関する話題が提示されているだけでなく、パラグラフ構成の概念が導入されていることで、教養を高めるためのリーディングの基盤が築かれていると言えるからである。

4.2. 学生へのアンケート

学生101名へのアンケートとして、2問の自由記述式アンケートを行った結果は下記の表4・5のとおりである。それぞれ、学生が大学に入学し、1学期間授業を受けたコメント、そして使用したテキストに関してのコメントとなる。各表には、4人以上のコメントが集まったものがまとめられている。

表 4：1 学期の授業に関するコメント

コメント	人数
グループ活動が楽しかった	20
予習が重要、必要であることがわかった	16
難しかった	10
進むスピードが速かった	8
重要ポイントを読みとることで読みの意識が変わった	9
重要ポイントのみに焦点を当てる読み方が良かった	9
英語以外の知識を得ることができた	9
受験時代の英語力を失っていることに気付いた	6

表 5：教科書に関するコメント

コメント	人数
教科書が難しかった	23
教科書が少し難しかった	18
適切なレベルだった	11
単語が難しかった	11
いろいろなジャンルがあり面白かった	16
英語以外の知識が得られた	6
課によって難易度に差があった	4

高校と異なった形式の授業を受けた印象として、一番印象に残った点がグループ活動であるというのは意外であった。ペア・ワークが高校教科書のアクティビティの設定となっていることもあるが、まだ一般的に用いられる方法ではないと思われる。また、学生にとっては、コミュニケーションではなく、リーディングのクラスで用いられたことが新鮮であった可能性もある。

また、「予習の重要性、必要性」が挙げられたことも意外であった。このアンケート結果のみからの判断ではあるが、難しい教科書では予習をするが、易し

い教科書では予習はしないという学生の傾向が見られるように思う。授業が「難しかった」との指摘もあることから、予習をしなくては授業についてくることができない学生が多かったと推測できる。授業中に教室内を回っている際にも、教科書に書き込みをして予習をした形跡がある教科書やノートに作成された単語リストを目にすることが多かったことから、予習が行われた割合はかなり高かったと言える。

「重要ポイントを読み取ることで読みの意識が変わった」と「重要ポイントのみに焦点をあてる読み方が良かった」の双方を全文和訳に相對するものであると捉えれば、全文和訳ではない新たなリーディング方法に対する印象もかなり強いものであったと解釈できる。「進むスピードが速かった」と感じたのも、全文和訳を行わないゆえの特徴であるとの解釈が可能であり、全文和訳にかかる時間の長さを示しているとも言える。実際に、授業後に学生が「和訳が少ないと進むスピードが速くて大変だ」と話しているのを耳にしたことがある。しかし、高校3年次よりも読む英文の量を増やすことを意識した場合、全文和訳を行っている時間がないというのも事実である。

「英語以外の知識を得ることができた」という点は、全文和訳をすることなく、事実や情報を得る、あるいは著者の意図や見解を理解することができたということの意味する。アカデミック・リーディングの目的に向けて一歩前進できたということである。また、学生が英語を通して何かを学ぶことの重要性を反映しているともいえる。1つの課を読み終わった時点で、知的好奇心を満足させる情報、知識を得られることが重要なのである。これは、学生の教養が高まることも意味する。

一方、受験時代の英語力を失ったことに気付いたというコメントもあがっている。高校時代に勉強して身につけた英語力を大学で継続して伸ばす手助けをするという役割も一般教養英語には求められる。その際、高校時代よりも高い英語力を身につけることができるという感覚、大学生になり高校時代とは異なったアカデミックな英語を学んでいるという感覚を学生に与えることで、学生の英語学習に対するモチベーションを強化することが可能なのではないだろうか。

教科書に関しては、多くの学生が難しいと感じたことを挙げている。実際の学生の平均英語力よりも難しい教科書であるため、このような反応が多かったと思われるが、予習を促す材料として捉える場合には必ずしもマイナス要因ではない。ただし、過度に難しい教科書を選択しないという点は常に考慮されるべきであろう。

また、教科書に対するコメントとしても「いろいろなジャンルがあり面白かった」、「英語以外の知識が得られた」というコメントがあることは、読む意義を感じられる文章、何かを学び取れる教材を選択する重要性を示唆している。学生のモチベーションを維持するためには、いろいろなジャンル、あるいはトピックから構成されるアカデミックなテキストを使用し、1 課ごとに何か新しいことを学べる環境を作り出すことが重要なのである。

おわりに

一般教養英語のリーディングの目的は曖昧になりがちである。しかし、本研究を通し、統一プログラムが組まれていない場合にも、各々の教員が EAP の概念に沿って授業を組み立てる意義を示唆できたのではないと思う。高校英語教科書では、学年があがるにつれてアカデミックな要素が強いテキストになっており、3 年次にはアカデミック・リーディングの基礎となるパラグラフ構成の概念が取り入れられている。そのため、一般教養英語へ移行する際も学生が継続してアカデミックな英語を学ぶ機会を提供することが比較的容易に行える。また、学生が英語自体を学ぶだけでなく、何か知識を得ることができるアカデミックな教材を選択することも重要な要素となる。学生にとって適度に難しい教材である場合、予習や復習を促進する要素ともなる。そして、学生に高校時代よりも多くの英文を読む機会を与えるためには、全文和訳を行わない必要性も生じるだろう。

本研究では、現在使用されている高校英語教科書のトピック分析と、大学 1 年生が受けた最初の 1 学期の授業と使用した教科書に対するアンケート分析を行った。2013 年からは新たに改定される学習指導要領に基づいて執筆された高校教科書が使用される。その教科書を使用して大学に入学する学生がどのよ

うなトピックを学んでくるのか、学ぶ内容に異なった傾向は見られるのか等、継続した分析が必要である。また、全文和訳を行わず、アカデミック・リーディングを目標とした授業を1年間受けた学生にどのような変化が見られるのかという分析も今後の研究課題となるだろう。

参考文献

- 大学英語教育学会実態調査委員会 (2003) 『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究－大学の外国語・英語教育個人編』、丹精社、東京
- Dreyer, C., & Nel, C. (2003) Teaching reading strategies and reading comprehension within a technology-enhanced learning environment, *System* 31 : 349-365
- 深澤清治 (2008) 「読解を促進する発問作りの重要性－高等学校英語リーディング教科書チュの設問分析を通して－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』57 (2) : 169-176
- 深澤清治 (2010) 高等学校英語リーディング教科書分析－推論および自己表現を促す発問を中心に－、『広島大学大学院教育学研究科紀要』59 (2) : 195-202
- 長谷川修治、中條清美、西垣知佳子 (2006) 「大学入試英語問題語彙の難易度と有効性の時代的变化」、*JALT Journal*、28 (2) : 115-134
- 飯島優雅・菊池武・辻田麻里 (2011) 「Academic Listening Strategies I コース改革－ストラテジー重視のリスニング訓練を目指して－」、『獨協大学外国語研究』29 : 37-68
- 飯島優雅・志村美加・菊池武・長坂達彦 (2011) 「全学共通カリキュラム英語部門リーディング科目の取り組み」、『獨協大学外国語研究』29 : 117-139
- 石川和弘・白井恭弘・坂上嘉津子・山田裕紀子 (1987) 「第2回教科書分析まとめ」ASTE 第30回例会資料
- Jacob, E., Rottenberg, L., Patric, S., & Wheeler, E. (1996) Cooperative learning: context and opportunities for acquiring academic English, *TESOL Quarterly*, 30(2) : 253-280

- Jordan, R.R. (1997) *English for Academic Purposes: A Guide and Resource Book for Teachers*, Cambridge University Press, Cambridge
- 岡秀夫 (2011) 「教授法のバックボーンにあるもの」『英語教育』2011 年 9 月号：22-24
- 岡田伸夫 (2011) 「小中高大の連携のあり方」『英語教育』2011 年 9 月号：28-31
- 小野章・武久加奈 (2011) 「字義理解を超えたリーディングを目指して」『学校教育実践学研究』17：141-147
- Oxford, R.L. & Sokolik, M.E. (2010) *TAPESTRY Reading 4*, Shohakusha
- Singhal, M. (2001) Reading proficiency, reading strategies, meta-cognitive awareness and L2 readers. *The Reading Matrix* 1 (1), <http://www.readingmatrix.com/articles/singhal/index.html>
- 田地野彰 (2005) 「一般学術目的の英語 (EGAP) のコース設計に向けて」MN News, No.8
- 田地野彰 (2009) 「総合研究大学における EAP カリキュラム開発ー専門教育との有機的連携に向けてー」、福井希一, 野口ジュディー, 渡辺紀子 (編) 『ESP 的バイリンガルを目指してー大学英語教育の再定義ー』、大阪大学出版会、大阪
- 田地野彰・水光雅則 (2005) 「大学英語教育への提言」、竹蓋幸生、水光雅則編『これからの大学英語教育』pp. 1-46、岩波書店、東京
- 富山真知子編 (2006) 『ICU の英語教育ーリベラル・アーツの理念をもとに』、研究社、東京
- 八木慶太郎・伊藤秀子・波多野和彦 (2001) 「タスク (設問) に注目した英語読解の指導法ー教科書分析における課題と考察ー」、『メディア教育研究』7：103-116
- 山添孝夫 (2006) 「教科書コーパスから何が見えるか：高等学校英語教科書の場合」、『立命館言語文化研究』17 (4)：167-186

Reading for General Academic English Classes: Transition from High School English to EAP

Mika Shimura

Japanese university students usually take two General Academic English Classes, Reading and Communication, during their first two years. However, aims of these General Academic English Classes are unclear at many universities. The purpose of this study is to indicate the importance of conducting reading classes based on the concept of English for Academic Purposes (EAP). First, the analysis of major English textbooks used in high school shows that transition from high school English to Academic Reading for EAP is not very difficult. Second, a questionnaire given to first-year students who took a reading course indicates the importance of using a textbook that includes academic topics. These topics give students a chance to learn new information as well as English. It is also found that high level textbooks can encourage students to prepare for classes without translating every sentence into Japanese.